

説教 『恵みと痛み』山本 護 牧師
 聖書 ホセア書 6：4～6／使徒言行録 2：36～38

使徒は復活のイエスから教えを受け(使徒 1:3)、女たちやイエスの親族と共に祈りながら(1:14)、その日を待った(1:4～5)。そして五旬祭の日に聖霊を受け(2:3)、「ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた(2:14)」。ペトロは堂々とした説教をおこない(2:14～36)、「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはならない。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさった(2:36)」と結んだ。すると「人々はこれを聞いて大いに心を打たれた(2:37)」。

「心を打たれた」とはどんな感じなのか。岩波訳は「心を深く抉(えぐ)られた」と訳している。なるほど「打つ」の原意は「つき刺す」とか「抉る」で、激しい心の痛みを言い表すことらしい。だとすれば「心打たれた」感動なんかではなく、「ひどい苦痛を受けた」ということだろう。うしろめたさを感じているところに「あなたがたが十字架に着けて殺した(2:36)」と、ズバリ指摘されての苦痛。

場面を丁寧に思い描いてみよう。人々は、感動しているわけでは、まったくくない。狼狽し、混乱し、後悔の念に苛まれている。彼らは心に痛みを覚えながら、ペトロや使徒たちに「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか(2:37)」と恐る恐る尋ねた。するとペトロは、二つのことを命ずる。一つは「悔い改める」こと、もう一つは「イエス・キリストの名によって洗礼を受ける」こと(2:38)。

「悔い改め」とは転換、「すみません悪うございました」という反省とは違う。葡萄の木の譬ではこう語られた。「わたしにつながっているが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる(ヨハネ 15:2)」。私はこのように強く剪定され、新たに生まれ変わる。これが悔い改め。そして「洗礼、罪の赦し、聖霊の授与(使徒 2:38)」という根本的な実を結ぶ。悔い改めは罰せられることではない。痛みを伴う、大いなる恵みなのだ。悔い改めるには、剪定される痛みが生ずる。だから決意も鈍る。だが私たちは十字架の真実を目の当たりにして「心を深く抉られる(2:37)」。心を抉られた者は、もう悔い改めないわけにはいくまい。そう考えると、私たちの「心が抉られる」こともまた、大いなる恵みの一環ではないのか。

預言者は「お前たちの愛は朝の霧、すぐに消えうせる露のようだ(ホセア 6:4)」と御言葉を語る。私たちの「愛」もこのように軽いだらう。「それゆえ、わたしは彼らを、預言者たちによって切り倒し、わたしの口の言葉をもって滅ぼす。わたしの行う裁きは光のように現れる(6:5)」。こうして私たちは、御言葉によって切り倒されて「心を深く抉られる」。そして悔い改め、形骸化した信仰儀礼を放棄し、神の愛を得て、神を知る(6:6)。これは聖霊が授与されることの(使徒 2:38)、痛みを伴う恵みと希望。

「キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい(2:38)」。「罪の赦し」とは、「悔い改めるならなら大目に見ておこう」ということではない。鷹揚に見逃されることではなく、洗礼が象徴するように、日々生じる「汚れ」が、十字架の血と聖霊によって洗い浄められることなのだ。そしてそれは、一同に語られたことでありながら、一人ひとりに起こる個別の(2:3)悔い改めに他ならない。



《おまけのひとこと》

聖霊は賜物(使徒 2:38) 聖霊を受けた使徒 いつのまにか悔い改めていたらしい(2:38) 悔い改めは方向転換 振り返った方位が未来 十字架は 過去にではなく むしろ未来に建てられている